書式 C（WORD）

【提出期限：2021 年 6 月 30 日】

提出日：2021 年 6 月 30 日

提出者：地域健康社会学研究センター長・早川岳人

2020 年度　研究センター事業報告書

研究センター名	地域健康社会学研究センター

Ⅰ．研究成果の概要（公開項目）　※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。

１．地域健康社会学プロジェクト研究の推進

寄付研究プロジェクト（2016 年 4 月発足）時の主旨を引き継ぎ、住民の参加・協働による地域健康創出をめざす基礎的研究、歴史・実践研究、現状分析・方法開発の総合的な研究を行った。予防要因分析を通して政策構築に資する疫学研究の手法を用いて健康創出の社会的課題を明らかにするとともに、次の諸課題にわけて研究を推進した。

1. 京都における地域健康の歴史と実践
2. 福島の経験にもとづく地域健康づくりの現代的課題の追究
3. 地域健康社会学の創出と総合人間学の基礎的研究

2020 年度の主な取り組みとしては、2019 年度に当センターと滋賀県健康医療福祉部と協定を結び実施した、滋賀県国民健康保険加入者の健康福祉データ分析をもとに、県保健事業部会において、県下全市町へフィードバックを行った。このデータは 2013 年から 2017 年までの 5 年間の国民健康保険医療費データ、国保特定健康診査データ、介護保険受給データを使用したコホート研究データによるものである。

分析の結果、特定健診を受診していない群は、その後の医療費で入院かつ外来を受けている割合が高く、対して特定健診を受診している群は、外来医療のみを受けている割合が高かった。背景には、健康診断受診可否といった社会格差があると思われるが、市町村が実施する国保特定健診である点から、より積極的な受診勧奨が課題として明らかになった。一人当たりの医療費が特定健診未受診群で、受診群より約 2 倍高かったことから、受診勧奨を実施することで、その後の医療費の使われ方にも影響があることを示した。また、2013 年に自立していた者を追跡し、肥満度（BMI）と介護保険受給との関連リスク比を算出した。男性のやせ群は基準群に対して介護受給にいたるのは 4.8 倍（95%CI:2.2-10.5）高かったことから、やせはその後に介護にいたりやすいことをフィードバックした。これらの報告に対して市町の担当課からは、日々の実務から実感している内容と符合しており、今後、住民サービスを行っていく上でのエビデンスとして活用できる旨、評価をいただいた。

京都における地域健康の歴史と実践として、6 月にオンラインシンポジウムを開催した。ますます高齢社会が進み、がんを始めとしたターミナルケアの重要性が増す中、「死にゆく人はさみしいのか」というテーマで、保健・医療・福祉のあり方を考察した。上野千鶴子氏からは、いくつになっても人は死が怖く、思い残すことがあり、さみしさに身をさいなまれるものである、また、ターミナルケアを実践している医師の西智弘、岸上仁両氏からは、さみしさを取り除くだけでなく、老病死の真っただ中で人間として生きるとはどういうことかについて、闘病する本人や、遺される家族に対してできることを考えていくことが大切だと指摘された。認知症についても、介護が必要になっても安心して暮らせる社会、安心して認知症になれる社会を構築することが重要だと問題提起を行った。

福島県での地域健康づくりについては、引き続き郡山市保健所とともに、地区診断、健康格差について分析、評価を行っている。1 歳 6 ヶ月児健診から 3 歳児健診の間に育児不安を生じている割合が増加していることから、相談窓口の周知を図ることが示唆された。幼児のむし歯保有率の地域格差が大きく、高齢者との同居が多い地区で高くなっていることから、祖父母世代へのアプローチが有効と考えられた。東日本大震災後、小中学生の肥満が増加しており、将来の成人の肥満につながることが予想され、学校関係と連携した肥満予防の意識向上や啓発事業が必要である。

２．外部資金獲得の推進

センターの運営資金として寄附金を保有するほか、厚生労働行政推進調査事業費等を獲得している。また、個別の研究課題推進のため、科研費への申請も積極的に行った。センター長の早川が滋賀医科大学との共同研究を行い、疫学、公衆衛生学の観点から地域医療の可能性を模索するとともに、産学官連携や外部資金の獲得を見据えた研究を行った。全国から無作為抽出した対象者を追跡したコホート研究において、社会的要因に関する分析研究を行っている。

３．メディア媒体を使用した発信及び社会貢献

研究所ウェブサイト、ソーシャルメディアにおいての積極的な発信を行うとともに、各メディアの特性を生かした独自の情報発信についても工夫や分析を行い、より効果的な情報発信に努めた。

また、2016 年 7 月より取り組んでいる地元ラジオ局の番組について、2018 年度からは放送拠点を京都三条ラジオカフェに移し、引き続き小学生目線で観た地域の高齢者への作文を発信した。これらの作文を蓄積し、また、地域における高齢者の存在意義を抽出していくことで、高齢者・子ども・地域の役割を明らかにし、地域社会への貢献と研究素材の抽出を相互に行った。また、ラジオ番組での取組みを契機に小学生への出前授業を行い、日本の高齢化問題に対する相互理解を深めた。

2020 年当初より感染拡大した新型コロナについて読売新聞からの取材を受け、社会状況に対するコメントを行った。また、大学コンソーシアム京都の依頼により、コロナ禍においての「京都学生祭典」の進め方について助言を行った。

４．その他研究活動とその展開

滋賀県は全国平均寿命都道府県ランキングで日本有数の長寿県である。2017 年度より、滋賀県衛生科学センターから「滋賀県データ活用事業プロジェクト会議」メンバー（座長）の就任依頼を受け、健康や医療、介護など滋賀県健康寿命延伸のための各種データを一体的に分析・活用し、市町や県における予防的な取組みの推進を図っている。

滋賀県健康医療福祉部医療保険課が県下市町に実施している、国民健康保険運営方針等検討協議会保健事業部会で学識経験者として参加し、運営方針に対して助言を行っている。

また、京都府下、福島市を始めとした自治体にて、「地域に責任を持った保健活動の強化」をテーマとして講師を務めるなど、各種団体における講演依頼や委員委嘱依頼を積極的に受け、研究の今後の展開につなげている。

Ⅱ．拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2021 年 3 月 31 日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、必ず若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員（PD・RPD）

役割		氏名	所属	職位
センター長		早川　岳人	衣笠総合研究機構	研究教員（教授）
運営委員		中村　正	産業社会学部	教授
		松田　亮三	産業社会学部	教授
		サトウ　タツヤ	総合心理学部	教授
学内教員 （専任教員、研究系教員等）		開沼　博	衣笠総合研究機構	特別招聘研究教員（准教授）
		山口　洋典	共通教育推進機構	教授
		中妻　拓也	総合心理学部	助手
学内の若手研究者	専門研究員 研究員 初任研究員			
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	大学院生			
	学振特別研究員 （PD・RPD）			
その他の学内者 （非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等）				
客員協力研究員		日高　友郎	福島県立医科大学	講師
		春日　秀朗	福島県立医科大学	助教
		冨澤　公子	立命館大学産業社会学部	非常勤講師
その他の学外者 （他大学教員・若手研究者等）				
研究所・センター構成員　　計　10 名　（うち学内の若手研究者　計　0　名）				

Ⅲ．研究業績（公開項目）　※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。

本欄には、「Ⅱ．拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。（2021 年 3 月 31 日時点）

1．著書

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数

1	中村　正	マイクロアグレッション–人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別	共訳	2020 年 12 月	明石書店	朴希沙、金友子ほか	
2	松田　亮三	補論 米国の医療と脆弱な人々 in 社会的弱者への診療と支援　格差社会アメリカでの臨床実践指針	単著	2020 年 6 月	金芳堂		367-371
3	松田　亮三	社会的弱者への診療と支援　格差社会アメリカでの臨床実践指針	監修	2020 年 6 月	金芳堂	小泉昭夫監訳（原著 Talmadge E. King・Margaret B. Wheeler 編）	
4	松田　亮三	2020 International Health Care Systems Profiles	分担執筆	2020 年 6 月	The Commonwealth Fund.	the profiles edited by Roosa Tikkanen,Robin Osborn, Elias Mossialos, Ana Djordjevic, and George A. Wharton.	
5	サトウタツヤ	教育を心理学的に考えるとどうなるか？　育つ側・学ぶ側について理解して主体的に意味づけて生きる方法を身につける	単著	2020 年 8 月	ナカニシヤ出版竹尾和子,井藤元(編)『ワークで学ぶ発達と教育の心理学』, ナカニシヤ出版		3-16

２．論文

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	中村　正	男たちの「暴力神話」と脱暴力臨床論ー家庭内暴力の加害者心理の理解をもとにしてー	単著	2020 年 4 月	子どもの虐待とネグレクト 22(1)		50−56	
2	中村　正	地域との協働をかたちにする支援者支援セミナーの経験	単著	2020 年 4 月	対人援助学研究 10(6)		62−73	
3	中村　正	臨床社会学の方法(29)リアリティとは何か–「ひとりだけど、ひとりじゃない」世界から考える	単著	2020 年 6 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(1)		23-32	
4	中村　正	臨床社会学の方法(30)自由に生きるための知	単著	2020 年 9 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(2)		21-32	
5	中村　正	臨床社会学の方法(31)男らしさを「聴く」	単著	2020 年 12 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(3)		21-30	
6	中村　正	臨床社会学の方法(32)怒りが暴力を振るわせるのか–感情を生起させる「憎悪・嫌悪」の構図とアンガーマネジメントの乗りこえ-	単著	2021 年 3 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(4)		26-35	
7	松田　亮三	立岩真也著『病者障害者の戦後：生政治史点描』	単著	2020 年 6 月	立命館大学アジア・日本研究所立命館アジア・日本研究学術年報 (1)		125-128	
8	松田　亮三	新型コロナウイルス感染症への対応と保健行政の課題	単著	2020 年 9 月	住民と自治 (689)		5-8	
9	松田　亮三	「新型コロナ」から日本の社会を考える(第 4 回)新型コロナウイルス感染症への対応と保健行政の課題	単著	2020 年 9 月	自治体研究社住民と自治 (689)		5-8	
10	サトウタツヤ	Situational Experience around the World:A Replication and Extension in 62 Countries	共著	2020 年	Journal of Personality	Daniel I. Lee,Gwendolyn Gardiner, Erica Baranski, Erica Baranski, Members of the International Situations Project and Funder,D.C.		

11	サトウタツヤ	[心理学史　諸国探訪] デンマーク	単著	2020年4月	心理学ワールド (89)		29	
12	サトウタツヤ	Situational experience around the world: A replication and extension in 62 countries	共著	2020年5月	Journal of Personality	Daniel I. Lee Gwendolyn Gardiner Erica Baranski Members of the International Situations Project David C. Funder		
13	サトウタツヤ	新型コロナウイルスの拡散とそれに関するリスク：オンライン調査の結果対人援助学&心理学の縦横無尽　(28)	共著	2020年6月	対人援助学マガジン (41)		93-104	
14	サトウタツヤ	人々に共通する心理を知った上でマーケティングでは個別性をすくい取る	単著	2020年7月	宣伝会議宣伝会議 (947)		38-39	
15	サトウタツヤ	心理学史諸国探訪　ブラジル	単著	2020年7月	日本心理学会心理学ワールド (90)		29-29	
16	サトウタツヤ	大学生と接する全ての方に読んでほしい1冊『大学生のストレスマネジメント -- 自助の力と援助の力	単著	2020年7月	有斐閣書斎の窓 (670)		41-45	
17	サトウタツヤ	International Optimism: Correlates and Consequences of Dispositional Optimism Across 61 Countries	共著	2020年8月	Wiley Periodicals, Inc.Journal of Personality 88	Erica Baranski, Kate Sweeny, Gwendolyn Gardiner, Members of the International Situations Project, David C. Funder		
18	サトウタツヤ	消費者の「願い」からヒントを得る	単著	2020 年 9 月	宣伝会議宣伝会議 (948)		159-159	
19	サトウタツヤ	心理学と統計ー歴史的な検討を通じて未来を展望する	単著	2020 年 9 月	青土社現代思想 48(12)		154-163	
20	サトウタツヤ	キャリアと文化の心理学(1) 教育・発達心理学とキャリア教育の接合	共著	2020 年 9 月	対人援助学マガジン (42)	土元哲平	288-302	
21	サトウタツヤ	行為とその文脈を知るTEMという方法	単著	2020 年 10 月	株式会社宣伝会議宣伝会議 (949)		215	
22	サトウタツヤ	心理学史諸国探訪　ニュージーランド	単著	2020 年 10 月	日本心理学会心理学ワールド (91)		29-29	
23	サトウタツヤ	人によって異なる、「元の生活」をどう理解するか?	単著	2020 年 11 月	株式会社宣伝会議宣伝会議 (950)		183-183	
24	サトウタツヤ	チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題（1）　ー京都府立鳥羽高校のイノベーション探究Ⅰの実践からー	共著	2020 年 12 月	京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部　京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部　研究紀要 59	乾明紀,　田中誠樹,　竹林祥子,　大泉幸寛,　宮﨑雄史郎,　ミューリニコラス,　久保友美,　杉岡秀紀,　高野拓樹,	123-141	
25	サトウタツヤ	Happiness around the world: A combined etic-emic approach across 63 countries.	共著	2020 年 12 月	PLOSPLoS ONE 15(12)	Gardiner G, Lee D, Baranski E, Funder D, Members of the International Situations Project		
26	サトウタツヤ	看護専門学校に所属する看護教員の力量形成の構造ー中堅期にある教員の語りからー	共著	2020 年 12 月	看護教育研究学会看護教育研究学会誌 12	田中千尋	13-24	

27	サトウタツヤ	ビッグデータより『ナノ』データ	単著	2020 年 12 月	株式会社宣伝会議宣伝会議(951)		183	
28	サトウタツヤ	TEM（複線径路等至性モデリング）ふたたび	単著	2021 年 1 月	株式会社宣伝会議宣伝会議(952)		159	
29	サトウタツヤ	心理学史諸国探訪　アルゼンチン	単著	2021 年 1 月	日本心理学会心理学ワールド(92)		29	
30	サトウタツヤ	高大連携型教育を用いた探究学習に関する実践的研究－探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因－	共著	2021 年 2 月	京都大学地域連携教育研究 6	高野拓樹・松原久・糟野譲司・乾明紀・久保友美・杉岡秀紀	33-49	
31	サトウタツヤ	三鼎思考法で Market「ing」を捉えなおす	単著	2021 年 2 月	株式会社宣伝会議宣伝会議(953)		175	
32	山口　洋典	PBL の風と土：(13)安定的な行動・状況の背景に根ざす信念	単著	2020 年 6 月	対人援助学マガジン 11(1)		216-221	
33	山口　洋典	PBL の風と土：(14)学びの集団の成熟を通じた個々人の成長	単著	2020 年 9 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(2)		206-211	
34	山口　洋典	PBL の風と土：(15)所属の獲得と相互承認による学びと成長	単著	2020 年 12 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(3)		206-211	
35	山口　洋典	PBL の風と土：(16)身体性を重視して異文化対応に身構えを	単著	2021 年 3 月	対人援助学会対人援助学マガジン 11(4)		178-183	
36	山口　洋典	国際教育交流が育む学生ピア・サポートの多様化–多文化サービスラーニングの可能性を巡って–	共著	2021 年 3 月	立命館大学教育開発推進機構立命館高等教育研究 21	村山かなえ、北出慶子、遠山千佳、安田裕子	139-158	

３．研究発表等

No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	中村　正	ラウンドテーブル–立ち直りから「居直り」へ—ダルクの多元性・地域性を考える—	2020 年 10 月	日本犯罪社会学会第 47 回大会	高橋康史、市川岳仁
2	中村　正	虐待する父親への「男親塾」の取り組みから	2020 年 11 月	日本子ども虐待防止学会第 26 回学術集会	
3	中村　正	フランス児童福祉分野の対人援助 ー「予防」と「連携」そして「連帯」へ	2020 年 11 月	対人援助学会第 12 回大会	安發明子、中島弘美
4	松田　亮三	新型コロナ感染症にみる日本医療機構のレジリエンス	2020 年 8 月	日本医療福祉政策学会 第 4 回研究例会	
5	サトウタツヤ	ナラティブの心理学：ナラティブを再考する	2020 年 5 月	第 46 回日本コミュニケーション障害学会	
6	サトウタツヤ	How COVID-19 crises affect Higher education in Japan: An exploratory research by university instructors	2020 年 5 月	THE PSYCHOLOGY OF GLOBAL CRISES: STATE SURVEILLANCE, SOLIDARITY AND EVERYDAY LIFE	Ikumi Ozawa , Michiko Itou, Naoko Yokoyama, and Kiyoka Shigetoshi
7	サトウタツヤ	TEA 複線径路等至性アプローチにみる看護教員の力量形成過程～A 教員の自己内対話に着目した記号の三層化～	2020 年 9 月	日本看護学教育学会第 30 回学術集会	田中千尋・横山直子
8	サトウタツヤ	TEA によるキャリア転	2020 年 9 月	日本心理学会第 84 回大会	宮下太陽

		換経験の分析―分岐ゾーンにおける人と記号の調整過程に焦点をあてて―			
9	サトウタツヤ	国外の先行研究からみる日本型司法取引に関する研究の展望	2020 年 10 月	法と心理学会第 21 回大会	廣田貴也　中田友貴　若林宏輔
10	サトウタツヤ	キャリアの分岐ゾーンにおける TLMG とイマジネーション	2020 年 10 月	日本キャリア教育学会第４２回研究大会	宮下太陽
11	サトウタツヤ	Analysis of Bifurcation Zones in Career Transition	2020 年 10 月	台湾心理学会 59 回大会	Taiyo Miyashita
12	サトウタツヤ	コスプレの魅力とは-歴史的検討とフィールドワークの融合を目指して	2020 年 10 月	日本質的心理学会第 17 回大会	福山未智
13	サトウタツヤ	The Appeal of Cosplay as Seen through Fieldwork and a Historical Examination	2021 年 1 月	The 4th Transnational Meeting on TEA	Misato Fukuyama
14	山口洋典	共同オンライン対話：学生セッション	2020 年 8 月	JOELN・ISVS 共同オンライン対話セッション「With コロナ時代の海外・国内体験学習の現状と課題」	
15	山口洋典	交流委員会企画「ポスト質的心理学とこれからのアクションリサーチ－世界的危機の恒常化時代を迎えて－」	2020 年 10 月	日本質的心理学会第 17 回大会	日比野愛子・宮本匠・大石尚子・香川秀太・河合直樹
16	山口洋典	会員企画シンポジウム「ナラティブを通した意味生成における多声的空間の場とその意義－国際交流学生スタッフ経験についての TEM（複線径路等至性モデリング）図を通したマルチビュー・ダイアローグの試み－」	2020 年 10 月	日本質的心理学会第 17 回大会	北出慶子・遠山千佳・村山かなえ・安田裕子
17	山口洋典	言語文化的マイノリティの支援を通した E-サービス・ラーニングモデルの開発	2021 年 2 月	第22回国際ボランティア学会学術大会	北出慶子・遠山千佳
18	山口洋典	多文化コミュニティでの越境的な対話を通じた発達の径路：正課外の	2021 年 3 月	日本発達心理学会第 32 回大会	北出慶子・遠山千佳・村山かなえ・安田裕子

		市民性教育を通じた学生スタッフの学び合いと成長の支援に向けて			

４．主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1					

５．その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	中村　正	座談会：多声的で小さな物語を聴くことの意味 ―災禍を生き抜くレジリエンスとコミュニティ	対人援助学研究	2020 年 4 月
2	松田　亮三	Japan's Response to the Coronavirus - Now updated (18 May 2020).	Cambridge Core Blog (https://www.cambridge.org/core/blog/2020/04/11/japans-response-to-the-coronavirus-pandemic/)	2020 年 1 月～2020 年 4 月
3	松田　亮三	Japan's Response to the Coronavirus(11 April 2020).	Cambridge Core Blog (https://www.cambridge.org/core/blog/2020/04/11/japans-response-to-the-coronavirus-pandemic/)	2020 年 1 月～2020 年 4 月
4	サトウタツヤ	「日赤発」この情報本当？新型コロナ「医療ひっ迫」ＬＩＮＥ拡散　識者「典型的デマの手法」	東京新聞	2020 年 4 月
5	サトウタツヤ	感染デマにチラシで対抗、愛知 死亡のうわさに店主憤慨	共同通信	2020 年 5 月
6	サトウタツヤ	コロナ情報の信ぴょう性、7 割近くがチェック　立命館大がオンラインで調査	毎日新聞	2020 年 5 月
7	サトウタツヤ	Frontline health workers in Japan face discrimination over virus	KYODO NEWS	2020 年 5 月

６．受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1					

７．科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	早川　岳人	ライフコースを通じた現代日本人のための循環器疾患発症予測ツールの開発	基盤研究(B)	2019 年 4 月	2022 年 3 月	分担
2	松田　亮三	多様化する社会における福祉体制の動態―日韓台比較研究を通した理論開発	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2024 年 3 月	代表
3	松田　亮三	個人のライフコースと地域環境の変化を統合する健康地理学の研究	基盤研究(A)	2020 年 4 月	2025 年 3 月	分担
4	中村　正	男性性と暴力の臨床社会学的研究	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2022 年 3 月	代表
5	中村　正	教養知とその形成―その比較分析と教養教育の類型化の実践的検証	基盤研究(C)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	分担
6	サトウ　タツヤ	「わかる」と「できる」が拡大し，キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2022 年 3 月	分担
7	山口 洋典	市民性涵養の関係性モデルを軸とした地域参加学習カリキュラムと教授法の開発	基盤研究(C)	2018 年 4 月	2022 年 3 月	代表
8	山口 洋典	日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2021 年 3 月	分担

８．競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割

1	早川岳人	新旧（1980-2020 年）のライフスタイルからみた国民代表集団大規模コホート研究	厚生労働行政推進調査事業費	2020 年 4 月	2021 年 3 月	分担
2	中村　正	フォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座の開講	日本財団助成金	2020 年 4 月	2021 年 3 月	代表

９．知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人 区分	発明人 区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
1								